

# 瘻孔周囲過剰肉芽に対しステロイド外用治療が有効であった3例

町立南伊勢病院 看護部 ○里中千加

目的：脳血管障害・嚥下障害をもつ高齢患者が増加する昨今、胃瘻・腸瘻栄養を必要とする患者も増加している。これらの患者には瘻孔周囲過剰肉芽がしばしば発生するが、治療法は確立されていない。今回私たちはステロイド外用剤による簡便な治療を試みた。

方法：対象は在宅ないしは療養入院の胃瘻・食道瘻患者で、過剰肉芽を発生したもの。当院で発生した3例について follow した。瘻孔周囲の正常皮膚との境界に発生した、発赤・浸出・出血を呈する肉芽を瘻孔周囲過剰肉芽と定義した。治療前に周囲皮膚に発赤・熱感をもつもの、発熱など全身感染徴候を呈するものは除外した。処置の方法は、洗浄後乾燥を確認し、肉芽全体にベタメサゾン（リンデロン VG）外用剤を1日1回塗布し、そのまま被覆せずにタオルなどで保護するのみとした。

観察項目は、浸出液の量、色、肉芽の色、性状、出血の有無、大きさとし、過剰肉芽の消失および癒痕化をもって治癒と判断した。

結果：瘻孔周囲過剰肉芽は、平均22日±5日で治癒に至った。経過中、感染症などの合併症は認められなかった。また、処置に携わった患者の家族、看護師からは処置が簡便であり負担にならないといった意見が聞かれた。

考察：ステロイド外用剤塗布による創傷治癒の作用機序としては、局所の血管収縮作用と抗炎症作用が挙げられる。今まで硝酸銀による化学的焼灼や電気メスによる機械的焼灼などが行われてきたが、局所の血痂を形成したりして治癒までに時間がかかり、かつ再発も多かった。被覆材とステロイド外用剤を併用した症例報告はあるものの、手技が煩雑で、普及が困難と思われた。今回提示した3例のステロイド外用療法に関しては、全て合併症を発生せずに短期間に治癒に至り、今後、特に在宅患者に関し広く普及が期待される治療法と考えられ、若干の文献的考察も含めて報告する。